

論理的思考力の育成における反論の有効性の検証

— 香西秀信『反論の技術』の理論を取り入れて —

Verifying the effectiveness of counterarguments in developing logical thinking skills

— Incorporating the theory of Hidenobu Kozai's "The Art of Refutation" —

次世代教育学部教育経営学科

内田 仁志

UCHIDA, Hitoshi

Department of Management for Education

Faculty of Education for Future Generations

要旨：本稿は小・中学校において論理的指導力を育成するために宇都宮大学教授 香西秀信が1995年に著した『反論の技術 その意義と訓練方法』の理論と訓練方法を小学校4年生の議論指導に取り入れ、実践を試みたものである。考察ではなぜ論理的思考力の育成が求められているのか、そしてその能力の育成のために議論指導がなぜ有効なのかを明らかにしている。さらに議論指導でも特に反論の訓練のみ取り上げており、指導方法を具体的に紹介しているので本稿は追実践により教育界に広く普及していくことが期待できる。

Abstract：In order to develop ethical leadership skills in elementary and junior high schools, this paper incorporates the theory and training methods of "The Art of Refutation: Its Significance and Training Methods" written in 1995 by Hidenobu Kozai, a professor at Utsunomiya University, into discussion instruction for fourth-grade elementary school students. This is an attempt to put it into practice. The discussion clarifies why it is necessary to develop logical thinking skills and why discussion instruction is effective for developing this ability. In addition, since the discussion guidance specifically focuses on rebuttal training and specifically introduces the teaching method, it is expected that this paper will be widely disseminated in educational societies through supplementary examinations.

キーワード：国語教育, 論理的思考力, 香西秀信, 反論

Keywords：Japanese language education, Logical thinking ability, Hidenobu Kozai, counterargument

1 はじめに

1.1 論理的指導力の育成の現状

筆者はこれまで小中学校で論理的思考力の育成の研究を続けてきた。論理的思考力については算数科で「言語活動の充実」が求められ、見出した考えを、条件を変更した場面に活用して発展的に考察し、考えを説明する力、つまり思考力・表現力の育成が課題となるなど急速に学習過程に占める割合が高まっている。また道徳においても「考え、議論する」授業が提唱されるなど、論理的思考力の育成は急務になってきている。

国語科においても説明文を中心に論理的思考力を育成する指導例が過去に報告されている。しかしながらこれまで国語科において論理性的指導とは、習っている教材を「解釈」するための学習であり、教材の文章構成を理解し、内容を理解するための方法として取り上げられている。したがって「読む領域」において論理的思考力の育成の授業は多いが、現指導要領で求められている「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、「話す・聞く」領域での先行研究は研究の歴史が比較的新しいために乏しいのが現実である。「話す・聞く」領域で論理的思考力を育成する指導法を探るときに「議論」の果たす役割に着目しなければなら

ない。

1.2 『反論の技術』が出版された背景

本稿で取り上げる香西秀信著『反論の技術』¹⁾(以下、同書と表示)が発刊されたのは1995年である。その3年後の学習指導要領で初めて「話し合い」が取り上げられ、相手や目的、意図に応じ、筋道を立てて話したり、相手の話の中心や意図を聞き取ったりする能力の育成を重視した目標が示された。学習指導要領でも示された通り、国語科で「適切に表現する能力」を育てていくことが目標とされ、読み取り中心から「話す・聞く」をはじめとした音声言語指導の重要性が認識されつつあった。教室でもディベートや討論など、様々な「話す・聞く」活動が取り入れられた。しかし問題が生じることとなる。それは話すという活動だけが目的になっていて、議論の技術、とりわけ本稿で着目する「論理的思考力」が教えられていないということである。同書はそのような現状を憂い、教師が論理的思考力は何かという定義を理解し、教室での実践力を付けることを目的に出版された。では現在では論理的思考力について、どのような現状になっているのだろうか。「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」(文科省、平成28年8月26日)において、これからの教育で育成すべき資質・能力が示され、その資質・能力を育成するための授業改善が求められている。論理的思考力の育成はその中の一つとして位置づけられている。

2 現状

2.1 児童の実態調査

児童の論理的思考力の高さを調べるために全国学力・学習状況調査²⁾による結果を取り上げた。次のような課題が報告されている。

・「立場や根拠を明確にして話し合うことについて、発言をする際に一定の立場に立ってはいいるが、根拠を明確にした上で発言をする点に、依然として課題がある。」(「平成26年度全国学力・学習状況調査の結果」から)

・「新聞のコラムを読んで、筆者の意図や思考を想定しながら文章全体の構成や表現の工夫を捉えることに課題がある。また、引用することに、依然として課題がある。」(「平成27年度全国学力・学習状況調査の結果」から)

また「平成29年度全国学力・学習状況調査の結果」

から次のような結果が報告されている。

【表1 「平成29年度全国学力・学習状況調査の結果」から】

児童の情報活用能力に関する傾向

問題の傾向	正答率(%)
整理された複数の発言者の情報の正誤を読み取る問題	62.4
プレゼンテーションソフトにて画像を活用してスライドを作成する問題	33.3
一覧表示された複数のカードにある情報を整理・解釈する問題	17.9
2つのウェブページから共通している複数の情報を整理・解釈する問題	16.3
複数のウェブページから情報を見つけ出し、関連付ける問題	9.7

2.2 児童の課題

以上のことから次のような実態が明らかになった。

児童は整理された情報を読み取ることはできるが複数のウェブページから目的に応じて、特定の情報を見つけ出し、関連付けることに課題がある。つまり論理の整った文章を構成することに課題がある。

また、情報を整理し、解釈することや受け手の状況に応じて情報発信することに課題がある。つまり相手意識が育っていない。

実態から児童の論理的思考力の育成において次のような課題を挙げることができる。

- 児童は筋道立てた文章、すなわち論理的な文章について育成が不十分で『反論の技術』が刊行された1995年当時の問題が解決されていない。
- 児童が発信する情報は情報を受け取る相手を想定していない。自分の内面の解釈で論理は完結してしまっている。
したがって以下の指導が必要である。
- ◎ 児童に対し、論理の整った文章構成を指導すること
- ◎ 自分の発信する情報は誰が受け取るのか相手意識を育てること

以上は学習指導要領に求められる学力、すなわち「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」を身につけるためにも必要である。

3 課題の解決のために

3.1 先行研究の考察

1.1で示した論理的思考力の育成のための先行研究について紹介し、論理的思考力の育成が図られていないのかを明らかにする³⁾。

研究の方針としては

- 先行研究を調べ実践の適否を検討する
- 学校の事情、児童の実態に応じ実践可能な先行研究を追実践し、効果を検証する

の2点を実践するようにした。

筆者が追実践した主な先行研究は次の通りである。

① 新三読法 説明文の「内容主義」の否定

阿部(2021)⁴⁾は説明的文章を読む学習で「専らその内容を理解することを重視」する「内容主義」を否定した。そして説明文の読みは作品を「評価、批判」することだとして、その読み取った結果を「書き」に発展させるとしている。しかしながら内容を読み取るだけではなく、作品を批評して文章化するのは文章構成さえ理解していない児童には難しい。したがって本実践で論理的思考力の育成は難しく学級で全児童に実践するのは不可能である。

② 三層読み 説明文の読解指導

森田(1988)⁵⁾は文章の読みの過程を三層に分けている。第一層は、文章の内容や事柄に関心が向く読み。第二層は、文章の表現形式や論理構造に目が向く読み。そして、第三層は、書き手の立場を総合的に捉え、評価する読みである。実践では多くの児童は第一層にとどまっている。また第2層の児童も内容を読み取るための助けとして論理をとらえており、その作品だけの文章構成にとどまり汎用性がないのが残念である。

③ 説明文の読み書き関連指導

長谷川(2018)⁶⁾は「これからの中・高等学校の国語科授業では、論理的文章を『書く』ために読むという指導が重要」と主張する。これは前述した森田の第2層の読みと同じであり、主題を変えるだけで文章構造が同じ作文となり汎用性がない。

以上のように論理的思考力の育成については説明文の指導が用いられたが内容を読み取ることに主眼が置かれ、学習した教材文がどのような文章構成を為しているかという論理の読み取りだけに終わっているのが現状である。

3.2 意見文の課題

それでは意見文の指導はどうか。香西は説明文ではなく意見文を題材にし、論理的思考力の育成を行った。意見文についても次のような不備を指摘している。

① 反論できる意見文が少ない

香西(1995)は9ページ、113ページにおいて教材文選択の条件を述べている。現行の意見文指導では「だれも反対しないような意見文を述べている」と問題点を挙げ「無理にでも異論反論を思いつかせるような指導をしなくてはならない」と述べている。(pp. 19-34) 同書では児童の「命は大切」という作文を取り上げて誰も反対しないような主張を書いた意見文を戒めている。管見でも児童に意見文を書かせると「いじめはよくない」や「自然は大切な」などのテーマが見られる。しかしながらこれらのテーマは誰も反論できないこと、要するに一般的に当然のこととして認識されていることである。このような反対できないことは意見として主張すべきではない。したがって教師は生徒が反論できる文章を選択する、あるいは自作する能力が求められる。

② 反論の型が教えられていない

香西(1995)「5論証の方法やその種類について教えられていない」と述べ、反論の型を教える必要性を述べている。したがって教師は反論の型を修得し生徒に教える能力が必要である⁷⁾。

ではなぜ反論の型が教えられていないのか。これは香西(1995)と一般の教室では意識の違いがある。その意識の違いについて説明してみよう。香西は意見とは論理で自分の立場・主張を明確にし、相手との相違を見いだすためのものだ。そして議論で必要なことはこの意見の対立において他にはない⁸⁾したがって議論において児童の答えは賛成か反対かの二者択一であり、「どちらとも言えない」などという、あやふやな答えは許されない⁹⁾。

反論の型が身につけていないと議論はどうなるか。賛成か反対かの議論が活発化せず、「なんとなく」賛成、あるいはリーダー的な子の意見にほとんど賛成してしまうことが多くなる。そのため会議では満場一致でほとんどの議題は可決される。しかし、いざ実行の段階になると一部の不満が常に爆発することになる。

以上、現行の意見文指導で主張とそれを支える論拠があるという論理性さえ児童は身につけていないことを述べた。

以上の課題を克服し、児童の論理的思考力を高める

ために本稿では香西（1995）による反論の指導を試み検証した結果を述べる。

4 議論で反論を教える意義

4.1 「話す・聞く」領域を取り上げる理由

平成29年度告示の学習指導要領の背景について、中央教育審議会の答申（2016年12月、以下「答申」）では、現在の子どもたちが社会人となる2030年を念頭に置き、「社会の変化は加速度を増し、複雑で予測困難」としている。そして「社会の変化にいかに対処していくかという受け身の観点に立つのであれば、難しい時代になる」と捉えている。現学習指導要領では、こうした時代の流れの中で、子ども一人一人が未来の創り手として、決まった答えのない課題に積極的に取り組み、試行錯誤しながら新しい価値を創造できるようにすることを旨とした内容になっている。そのために国語科では次の3点が特に求められている。

- 何ができるようになるか（資質・能力）
- どのように学ぶか（指導計画および学習・指導方法）
- 何が身についたか（学習評価）

現行の学習指導要領「国語科」では「思考力・判断力・表現力等」の項目では、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域で構成されている。それぞれの「言語活動事例」を設けた授業内容が示されている。

① 「話すこと・聞くこと」

- 構成の検討、考えの形成（話すこと）
- 話の内容が明確になるように、構成を考えることを通して、自分の考えを形成すること

② 「書くこと」

- 構成の検討
- 自分の思いや考えが明確になるように文章の構成を考えること

③ 「読むこと」

- 構造と内容の把握
- 叙述に基づいて、文章がどのような構造になっているか、どのような内容が書かれているかを把握すること

全領域で論理性を教えることが示されている¹⁰⁾。

本稿はその中でも「話す・聞く」領域において反論の効果について検証する。

4.2 反論の有効性

国語科の意義について述べる。国語を学ぶ意義については「言葉による見方・考え方」が位置づけられ自分の思いや考えを深めるため、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉え、その関係性を問い直して意味付けることとしている。従来の指導では説明文や物語文の読解指導は内容の読み取りに重点が置かれ学習指導要領で示す「詳細な読解」に偏りがちであった。その結果、令和元（2019）年12月3日、経済協力機構（OECD）が平成30（2018）年に実施した国際的な学力調査の結果では前回の平成27（2015）年調査の結果と比較して、日本の若者の読解力の低下が浮き彫りになった。

これまでの指導では特に中等教育では入試を意識して暗記に頼る学習が一般的になっている。知識偏重の暗記型の入試が多いことが影響しているという。

「正解は一つだけではない」「人と考えが違っていてもいい」と思えることができるように学習環境を整える、書くという活動を重視する、このような環境づくりに努めることが大切である。

そのような現状を改善するため香西（1995）は論理的思考力の育成のために反論を取り入れた議論指導の実践を試みた。同書で反論の有効な点として以下の点を指摘している。

- 教育現場は多忙で議論指導に多くの時間を割くことができない。
- 学校教育で期待されている程度の議論の能力は反論の訓練だけで十分身に付く。
- 現在の教育現場では「話し合い」が重要視されている。話し合いでは異なる意見を聞き、自分の考えを深めていくことになる。これは反論の訓練そのものである。このように反論の訓練は自分の考えを深化するためにも必要な訓練なのである。

5 反論の訓練の仕方 特に身につけるべき能力

5.1 教材文を選択する

香西（1995）は教材文の条件として次の6つを挙げている。

- ① 主張が明快であること
- ② その主張を支える根拠がきちんと書かれていること
- ③ ある程度の長さを持っていること
- ④ 論じるのに特殊な専門的知識を必要としないこと

- ⑤ 生徒の現在の生活から遊離したものでないこと
- ⑥ 読み手を意識し、挑発的な文章で書かれていること

5.2 教材文を選択する

教材文の例

私は運動会の徒競走に不満があります。それは徒競走の組み分けが機械的に背の順で決められてしまうことです。だから組によってはあまり走るのが得意でない子が一位になったり、その逆に速い子どうしで走るために2位になったこの記録が他の組の1位の記録よりもすごくよくて不公平に感じることもあります。速い子と遅い子が走るとすごく差がついたりしてかわいそうです。

他のスポーツを見て下さい。柔道やボクシングが体重別で分かれているように本来スポーツは力の同じ者どうしが競い合うものです。だから運動会の徒競走も前もってタイムを計り、同じレベルの子どうしで走るように組み分けすべきです。

(児童S)

5.3 主張と理由を確認する

- 陥りやすい誤り

児童Sが指摘している問題点は何か。これは「徒競走の組み分けの方法」である。何も指示せずに議論させると、徒競走の組み分けをすることがいいか悪いか等、Sの意見とどんどん離れてしまいます。あくまでSの意見、徒競走の組み分けの仕方に対して反論が述べられるように指導します。

- 主張とそれを支える理由の確認

Sは「スポーツは同じ力どうしの者が競い合うべき。だから運動会の徒競走もタイム別にすべき」と主張します。理由として「柔道やボクシングは体重別にして力の同じ者どうしが戦う」としています。

- 理由に対し反論を考える

反論を考えるために「徒競走」と「柔道やボクシング」の違いを明確にします。

- 違い1 「参加の条件」と「結果の条件」

「柔道やボクシング」は体重別という、いわば「参加の条件」が同じです。だから勝負はやってみなければ分かりません。一方、「徒競走のタイム順」は勝負した後の結果で分けられています。

- 違い2 クラス分けの理由

「柔道やボクシング」が体重別に分けられているのは勝敗ではなく危険性です。ボクシングでヘビー級と

フライ級が戦ったらどうなるか想像してみてください。そのような危険をなくすためにクラス分けを実施しているのです。だから「徒競走」とは比べられません。

5.4 反論の型を学ぶ

- ① 文章構成の指示 (同書pp.121-127)

次のような文章の型を教える。

- 自分の立場の表明

反論ですから「反対です」となる。

- 反論する箇所の引用

必ず反論する相手の主張を「引用」する。そうすることにより何に反論しているかが明確に相手に伝わる。

- 反論

反論を「箇条書き」にする。そして結びの言葉を書いて終了となる。

- ② 反論の文章例

実際の反論の文章は次のようになる。

私はSくんの意見に反対です。【自分の立場】

Sくんは「本来スポーツは柔道やボクシングが体重別で分かれているように力の同じ者どうしが競い合うものです。だから運動会の徒競走も前もってタイムを計り、同じレベルの子どうしで走るように組み分けすべきです。」と主張しています。しかし私は次の理由でSの意見に反対します。【反論する箇所の引用】

第一に、「柔道やボクシング」は体重別という「参加の条件」が同じです。だから勝負はやってみなければ分かりません。一方、「徒競走のタイム順」は勝負した後の「結果」で分けられています。【反論1】

第二に、「柔道やボクシング」が体重別に分けられているのは勝敗ではなく危険性です。ボクシングでヘビー級とフライ級が戦ったらどうなるかを想像してみてください。危険をなくすためにクラス分けを実施しているのです。【反論2】

以上の理由によりSくんの意見はなりたちません。

【結語】

文章構成を学ぶ訓練なので児童の創意工夫は取り入れず指示した型通りの文章にすることが大切である。

5.5 反論の効果

上記の反論文には「主張」「理由」だけでなく「引用」「型の提示」という論理的思考力育成に必要な技

術が含まれている。このように『反論の技術』には様々な言語能力を育てる技術が含まれているのである。

6 研究のまとめ

『反論の技術』を追実践することによって児童の「論理的思考力」の育成に役立ったか、実践してみてもの考察を述べる。

実践の結果、30人中24人が反論の型を守った反論を書いていた。ただし型を守っても以下のように課題があることも明らかになった。また型を守らない児童には6.2に挙げた課題も明らかになった。

6.1 型を守って書いた児童の課題

- ①引用がよくできていない。正確に問題文を引用しないで、自分の言葉で書き直している事例がある。
- ②相手側の主張が理解できていない。これは問題文の意味がよく理解できていないからである。
- ③段落間では文章が論理的につながっているが、接続詞を用いていないために段落どうし全体のつながりが悪い。

6.2 反論の文章の型を守っていない児童の課題

- ①問題文が何を主張しているかが分からない。これは読解力の不足である。
- ②主張が理解できても自分の立場が決められない。これは議論指導の訓練ということがつかめず、問題文と自分の意思を同一視してしまうためである。だから問題文に賛成ということで思考がストップしてしまっている。
- ③段落構成を無視して自分の考えを書いている。

6.3 考察

議論指導であるから反論の次は再反論することである。しかし反論が曖昧だと討論しているうちに論点がどんどんずれていくことが分かった。論点がずれないためにも型をきちんと指導し守らせることは重要である。

7 終わりに

本実践は児童の論理的思考力を高めるために「反論」に絞って実践を試みた。成果と課題をあげる。

成果は以下の2点である。

- ・よい聞き手の育成に役立つ。意見を聞くときに反論しようと思いながら聞くのと漠然と聞くのとでは話す内容の理解に格段の違いが見られる。
- ・「型」の指導をすることにより多くの児童が構成の整った文章を書くことができるようになった。

次に課題である。

- ・事前指導で反論の型を指導したにも関わらず、それを使って反論の型が書けない児童が数人いた。立論の文章構成の理解には個人差がかなりある。したがって事前指導では聞き手の理解度に注意しながら進める必要がある。
- ・反論の形式は整っているが反論に説得力がない場合も多く見受けられた。形式のみならず立論の論証をよく理解し、適切な反論を加えていく必要がある。

本稿は反論の訓練をきっかけとして議論指導を教室で行う機会を与えてくれた。今回の実践にとどまることなく、このような反論の訓練を何回もしていくと自然に児童の反論の文章は収斂していきポイントを外さないようになっていく。反論については「慣れ」も重要なことだと再認識した。

今後も「立論」→「反論」の授業の繰り返しにより議論指導の質を高め児童一人一人に自己表現力が身に付けられるような理論を構築したいと思う。

注

- ¹⁾ 明治図書、1995年。
- ²⁾ 2007年より日本全国の小中学校の最高学年（小学6年生、中学3年生）全員を対象として行われているテストのことである。テスト形式は算数・数学と国語と理科（2012年から、3年に1回）の3科目で、それぞれ知識力を問う問題（A）と知識活用力を問う問題（B）の2種類に分かれている。
- ³⁾ PISA2018「読解力」調査結果を受けて 令和元年12月4日 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会。
- ⁴⁾ 阿部昇（2021）『あたらしい国語科指導法六訂版』（柴田義松、阿部昇、鶴田清司編）学文社 pp. 62-69
- ⁵⁾ 森田信義（1988）『説明的文章教育の目標と内容』、渓水。
- ⁶⁾ 長谷川祥子（2018）「論理的文章を『書く』ために

読む指導 —中学校国語科授業の研究実践報告—」
国文学言語と文芸の会編『言語と文芸』133号
pp. 101-118 おうふう社。

7) 『反論の技術』が予想をはるかに超えて読まれ、私が指導した人以外でも、反論の訓練に興味をもち、それを実際に試してみようとする奇抜な教師が現れた。だが、彼ら自身は、教員養成の場で論証や論理的思考の訓練を受けたわけではないので、教材の選び方を始め、その指導にはなかなか苦勞しているようである（その手の訴えをしばしば受ける）。また、自己流で実践したために、私から見ると、明らかに誤りである指導もときどき目にする。私の本を参考文献の第一においた、間違った反論の訓練の実践報告書を送っていただくと、ありがたいのと情けないのとで、じつに複雑な気持ちになる。こうしたことから、反論の訓練を実践しようとする教師のために、ほんの少しでも参考になることを願い、この小さな書物を出版することにした。

8) 同書 p. 18

9) 香西（1995）は意見は対立するものとして次のように述べている。

『『意見』というものは本来的に対立するものである。これは、われわれがなぜ意見を主張するのかということを考えてみればよい。われわれがある意見を主張するときには、それを意識しているにせよしていないにせよ、前提とするひとつの認識がある。それは、われわれの意見と対立する意見の持ち主がいる、あるいは対立しないまでも、無条件で賛成しない人間がいるという認識である。もし、全員が自分の意見に賛成ならば、わざわざそれを主張し、論証する必要もないからだ。p. 19

10) 文部科学省 小学校学習指導要領（平成29年告示）
解説 国語編 p. 28

森田信義（1988）『説明的文章教育の目標と内容』、溪水社。

長谷川祥子（2018）「論理的文章を『書く』ために読む指導 —中学校国語科授業の研究実践報告—」
国文学言語と文芸の会編『言語と文芸』133号
pp. 101-118 おうふう社。

文部科学省 小学校学習指導要領（平成29年告示）
解説 国語編 p. 28

引用・参考文献

香西秀信、『反論の技術』、明治図書、1995年、p. 184
「平成26年度全国学力・学習状況調査の結果」、国立教育政策研究所、平成26年。

「平成27年度全国学力・学習状況調査の結果」、国立教育政策研究所、平成27年。

「平成29年度全国学力・学習状況調査の結果」、国立教育政策研究所、平成29年。

阿部昇（2021）『あたらしい国語科指導法六訂版』（柴田義松、阿部昇、鶴田清司編）学文社 pp. 62-69